

占い師のなりかたと自己像 —東海地方の占い師の事例から—

An Anthropological Study on how to be fortunetellers and Self-Image of them A case study of fortunetellers in Tokai area

天野 紗緒里
AMANO, Saori

摘要

The purpose of this paper is to clarify how people become fortune-tellers and what kind of self-image they hold in their activities, with the aim of reconsidering fortune-tellers as folk shamans in contemporary Japanese society, and to gain suggestions for future research on shamanism and spirituality. This paper focuses on the people who are belonged an “Uranai-no-Yakata (house of fortune-telling)” because they are considered fortune-tellers, generally. It clears fortune-tellers attend courses and master divination, whether it is cosmological or spiritual one. It shows there is possibility that fortune-tellers accepted the image of "a fortune-teller is a counselor" presented by Ehara Hiroyuki, who appeared in the media in the 2000s, as their self-image. It said to that people anguished because the image of "how people should live" is different from between traditional religions and folk beliefs and today's society. Therefore, people need spirituality as a new religion in urban societies. This paper indicates that people's concerns and lives reflect in the diversity of fortune-tellers.

キーワード： 占い師 スピリチュアリティ スピリチュアル・カウンセラー 癒し

Keywords: Fortune-teller, Spirituality, Spiritual counselor, Healing

1. はじめに

近年、スピリチュアル、精神世界、癒しといった言葉と共に広がった「新しいスピリチュアリティ」は、個人の覚醒や意識変容を志向するものとして特徴づけられている[島菌 1992, 2012]。その社会背景には、自由な選択が許される代わりに全てにおいて自己責任が求められることや、現代社会が要請する人間像と伝統的価値観の不一致がある。こうした社会においては、全よりも個に焦点があたりがちで、スピリチュアリティの信仰・実践による恩恵が個人に還元されることが求められるという。特に、2000年代以降のスピリチュアル・ブームにおいては、「自分らしさ」と「自己実現」が重要視され、こうした希求を叶えるための「新しいスピリチュアリティ」が癒しのビジネスとして展開されている。特に、個人的な問題に対応する占いやレイキ、ヨガセラピーなどの1対1を基本とするような場所では、スピリチュアリティへの言及が積極的に行われる傾向がある[e.g. 小池 2008, 芳賀・弓山 1994]。

こうした個人的な問題に対応するスピリチュアリティの担い手として、伝統的には民間巫者

がいる。しかし、先行研究では決まった成巫過程を持ち、儀礼・祖先祭祀の中心的存在となる巫者に先行研究が集中する反面で、決まった成巫過程がない、あるいは儀礼の中心にならず私的な占い・まじない・祈祷などをする巫者は等閑視されてきた。例えば、1980年代まで東北や沖縄で盛んに行われたシャーマニズム研究では、エリアーデが示した成巫過程の3つの型——①召命型（神・精霊からの強制）、②世襲型（召命型の初代の権威継承）、③個人型（盲目などの特徴を持つ個人の意志または部族や氏族の意志）——に基づく詳細な事例の検討や、巫者になった契機が分析が行われた[エリアーデ 2004, 佐々木 1988]。これらの先行研究では、人生苦や能力の偶発による精神的葛藤を感じた人の選択肢が限定的な社会的状況があり、やむなしに巫者になる。現在では、医療・福祉制度の発達や儀礼の衰退により、先行研究が対象としてきたような巫者は激減しているという。

これに対し、2000年以降の研究では、従来の研究が看過してきた私的な占いをする巫者の増加が指摘されている。彼らは地域における巫者の断絶や伝統的巫者像に忌避感を覚えるなどの理由から、伝統的な成巫過程を踏襲しない点に特徴がある。この新しいタイプの巫者は個人的にテレビやインターネットで情報を集め、書籍や講座で自発的に学習することによって第六感の活用方法を身に付けて占い師のような活動をしているという[e.g. 塩月 2002, 村上 2017]。このような新しいタイプの巫者の個人的で積極的な態度は、先進国の都市的状況におけるアーバン・シャーマニズムの興隆に着目した Atkinson(1992)の分析とも一致する。アーバン・シャーマニズムは、1960年代のカウンター・カルチャーやニューエイジなどのムーブメントと重なりつつ展開し、よりどころのない現代社会で暮らす人々の不安定な精神状態を癒すものとして希求された。その特徴は誰でもシャーマンになれるという前提と、シャーマニズムを未開・伝統社会の限定された宗教現象から解き放ち、現代の人々の「生き方」の問題として捉える点にある。この現象は、特に中間層の人々によって支持され、彼らは自分と他者の癒しに関与したいという動機を有していた[Atkinson 1992: 322, ハーナー 1992: 7-18]。

こうした社会変化の中で生じてきた巫者の変化を動的に捉えようとする村上や塩月などの近年の先行研究は、スピリチュアリティの浸透や民間巫者の現代的なあり方の多様性を論じようとする点で意義がある。これらの先行研究は、枠の「内側」には先行研究が対象としてきた巫者を、枠の「外側」には一般的な占い師を想定し、その差異が曖昧になる「境界部」に巫者の現代的あり方や変容を捉えている。その際、「外側」である占い師の像は基本的にはメディアのイメージに基づいている。これは「外側」の占い師に関する研究が、2000年代にメディアで活躍した細木数子と江原啓之の2人の占い師の分析に集中したためだと考えられる。

マスメディアによる表象は占い師をタレント化するところから始まる。細木については、占いの信憑性よりも彼女の強烈なキャラクターに焦点が当てられている。当時、ポストが空いていた毒舌タレントとオカルトタレントという双方の要素を持ち合わせた細木に各メディアが一斉に飛びついたためである。彼女の冠番組の『幸せって何だっけ』や『ズバリ言うわよ!』は、

彼女が威圧的で攻撃的な態度で占星術の鑑定を行い、ゲストを叱咤激励する場面が目玉であった。これに対して、江原はスピリチュアル・カウンセラーとして紹介された。彼の冠番組である『オーラの泉』では、彼はにこやかで受容的な笑顔を浮かべて相談者に対峙し、第六感を活用した占いを行い、相談者の「自己発見」や「自己肯定」に寄与するような物語を穏やかな語り口で語った。いずれの番組も、当たる、奇跡を起こす、感動を呼ぶ、魂を癒すなどの定番の煽り文句でエンターテインメント性が過度に強調されていった。また、江原の登場によって怖くて怪しい霊能力というネガティブなイメージが、明るく楽しいスピリチュアルというポジティブなものへと変化していった。しかし、その後、週刊誌がテレビ番組を見てスピリチュアルに関心を持った人が靈感商法の被害に遭った事例や番組のヤラセ疑惑を取り上げると、次第に各メディアが占い師や宗教的なものをバッシングする際に繰り返し用いてきた金儲け主義、インチキ、詐欺、洗脳、悪徳などの言葉で細木と江原を表象するようになった。細木も江原もこれに反論したが、火に油を注ぐ形となりメディアから姿を消した[石井 2010]。メディアが大衆に与える影響は少なくないが、メディアがタレント化した占い師のイメージをそのまま社会で活動する占い師に当てはめることが妥当かどうかは、占い師の個別の事例検討を行った上で判断する必要がある。

本稿では、多様なスピリチュアリティの実践提供者の1つとして占い師を捉え、近年の民間巫者研究が「外側」とみなしている一般的な占い師の個別事例を検討する。具体的には、「占いの館」に在籍する占い師にインタビューを行い、なぜ占い師になり、どのような過程を経て占い師になり、どのような活動を行っているか、また、占い師としてどのような自己像を持っているかを聞き取り、その内容を分析する。その上で、占い師になる過程を明らかにし、メディアによる占い師像と占い師が有する自己像が異なることを明らかにする。このことを通じて、今後の民間巫者研究やスピリチュアリティ研究への示唆を得ることを目的とする。

2. 調査概要と定義

2. 1. 調査概要と調査対象者

調査は、占い師の活動場所として一般的である「占いの館」の1つ（名古屋市所在）で行った。本稿では「占いの館」を1人以上の占い師が待機する常設の施設で、相談者が占い師を選び料金を支払うことで占い師に占ってもらえることができる場所とする。「占いの館」はそれぞれに固有の名称を持ち独立しており、全国各地のデパートやショッピングモール、雑居ビルなどに所在する（注1）。「占いの館」の経営者は諸経費を負担して店舗運営を行い、占い師は業務委託契約を結び出来高制かつ歩合制で働く。どの店も明朗会計であることを強調し、名古屋市内の鑑定料金の相場は、1時間あたり6,000～10,000円程度である（注2）。

調査は2016年6月19日～10月3日と2017年2月6日～8月20日に断続的に行い、必要に応じて追加調査を2017年12月まで行った。調査方法はインタビューと参与観察で、筆者自身

も占い師として調査地の「占いの館」で勤務しながら調査した（注 3）インタビューは特に質問項目を設定せず、調査協力者の自由な語りを重視した。調査地の店舗は、地下鉄の駅から徒歩 5 分の雑居ビルの 1 フロアを占有しており、占いの鑑定ブースは 7 つある。在籍占い師の数は 40～60 人の間を推移しており、名古屋市内では比較的規模の大きい店舗である。出勤している占い師の人数は曜日や時間帯によって異なるが、平均 2～5 人という印象であった。

調査対象者は「占いの館」に在籍中／在籍経験のある占い師 29 人（男：女＝6：23）で、占い師の専業・兼業は不問とした。年齢の内訳は 20 代 3 人、30 代 2 人、40 代 6 人、50 代 11 人、60 代以上 8 人である。調査対象者の中には占い師を自称しない人もいるが、本稿では 2.2. の定義に基づき記述を占い師で統一する。調査対象を「占いの館」での在籍経験のある占い師に限定した理由は、一般的に「占いの館」に在籍している人は占い師と見なされる上に、占い師は「占いの館」の採用試験に合格し在籍することで、自分が一定水準以上の腕前を持つ占い師であることを示せると認識しているためである。採用試験ではオーナーや店長が自分や知人を採用希望者に占わせ、占いの腕前とコミュニケーション能力を判断する。調査地の店舗の店長によると採用率は 10% 程度である。インタビューは「占いの館」での待機時間の他にカフェやレストランなどにおいて対面で行い、必要に応じて電話やメール、SNS を用いた。なお、調査は南山大学研究倫理委員会の規定に従って適切に行い、本稿における情報は全て匿名化して記述する。

2. 2. 本稿における「占い」と「占い師」の定義

占いの定義は研究者によって様々である。本稿では「占い師による、必ずしも科学的な手法を用いない方法で過去・現在・未来の事象を知ること（判示）と、判示に基づく対処法の提示」とする[天野 2018]。占い師に関しては種田の占術を管理し使用する者という定義を用いる[種田 2001：264]。また、占術の類型化を試みた先行研究は[e.g. 1980, 鈴木 1995]、1 つの質問に対し 1 つの占術を対応させ占術の詳細な検討をしている。しかし、筆者の調査では、占い師は質問に対して複数の占術を組み合わせて、総合的に判断して結果と対処法を示す場合がほとんどであった。そのため、本稿では「スピリチュアルな占い」と「コスモロジカルな占い」に大別するにとどめる。前者の占いには靈感、霊視、透視、霊聴などの第六感とこれを扱う特殊な技能を占い師が有することが必須である。後者の占いには第六感は必須ではなく、各種占星術、手相、姓名判断、易、タロット占いなどの体系的な知識を習得すれば誰でも習得できる。

筆者の調査では、占い師は第六感を持つ人を指す特定の呼称は持っておらず、スピリチュアル系の人、スピ系、スピの先生などと呼んでいた。本稿では、占い師の民俗概念に基づき占い師を 3 つに区分する。第六感を用いた占いをする占い師は「スピリチュアルな占い師」、コスモロジカルな知識に基づいて占いをする占い師は「コスモロジカルな占い師」、両方をする占い師は「両系の占い師」と記述する。筆者が名古屋市内にある 3 系列の「占いの館」に在籍する占

い師 101 人のプロフィールを分析したところ、スピリチュアルな占い師は 10 人、コスモロジカルな占い師は 40 人、両系の占い師は 51 人であった[天野 2016 : 56-59]。

3. 占い師になる人々

2000 年代以降の民間巫者研究では、「境界部」の巫者は伝統的成巫過程の代わりにスピリチュアル講座を経て巫者になっていると指摘され、多様な生き方の 1 つとして巫者になるという選択があると考えられている。こうした学習過程や動機の在り方が「外側」の占い師との境界が曖昧になる原因の 1 つであると考えられる。この項では、5 人の占い師を取り上げ、一般的な占い師の学習過程について検討する。A はスピリチュアルな占い師の事例、B は幼少期から第六感の強さがほぼ変わらず両系の占い師になった事例、C は大人になり第六感が偶発し両系の占い師となった事例、D はコスモロジカルな占い師として活動し始めてからスピリチュアルな占いに関心を持ち、両系の占い師となった事例、E はコスモロジカルな占い師の事例の代表的なものとして選択した。

3. 1. 占いへの関心のめばえ

占い師になる前提として占いになんらかの関心があるはずである。ここでは、占い師になる以前に占いについてどう思っていたか、なぜ、占いに関心を持ったかについてまとめた。

A の事例：スピリチュアルな占い師（50 代男性 本業：IT 関係で自営業）

僕はもともと科学が大好きで占いは大嫌いだった。人間が作った占いなんかで運命を決められたくないと思ってました。スピに目覚めてからは、ますますそう思って、占い師は全員インチキやと思っていた。

B の事例：両系の占い師（20 代男性 本職：民間信仰の宗教的指導者）

祖母が霊視鑑定をやっとして、自分も幼少期から靈感があったもので、、、自然とですかね。

C の事例：両系の占い師（50 代女性 主婦、セラピーサロンを経営）

学校で友達とよく話したけど、関心は一般的やった。女子はだいたい占い好きやない？ 私は占いというよりも、人の心に関心があって、最初は心理学やカラーセラピー、アロマセラピーとかに興味をもって、そこからは行っていったよ。

D の事例：コスモロジカルな占い師（60 代女性 主婦、アルバイトとして占い師をする）

両親が商売をしていて占い師に相談してたけど、自分はそんなに興味なくて、正月に新聞屋がくれる本（高島易断）をちらっと見るくらいでしたね。結婚するときに親の勧めで、初めて

占い師にみてもらって、そのときはふーんという感じやった。でも、結婚して家を建てた後、ご近所トラブルがあって。占い師に占ってもらって心が軽くなって安心した。それで、なんでこんなことが分かるんだろうと興味が出ました。

E の事例：コスモロジカルな占い師（50代女性 主婦、専業占い師として自営業）

4歳の時に本屋で綺麗なカード付の本を見つけて親にねだって買ってもらったなら、タロット本やったの。その後、本や雑誌、テレビで自然と占いに興味を持っていったね。なんで、それでそんなことが分かるんやろうと思って。

3. 3. 占術の習得

占い師になるためには、何らかの占術を習得している必要がある。ここでは、占い師が何をきっかけとして占いの学習をすることに決めて、どのように習得したか、また、その占術はどのようなものかについてまとめた。

A の場合：偶然、スピリチュアルな占いを習得し、コスモロジカルな占いは学習するも断念。

大人になってから、ある時、寝て起きたら夢の中で全部知った。それまで大好きだった肉や魚を一切受け付けなくなって、感覚が鋭くなりすぎて体調不良に見舞われるようになった。僕の場合は見える聞こえるじゃなく「知っている」という感覚。相談者が僕を警戒してガードが堅いと何もみえない。だから、世間話をして一瞬の気のゆるみを待つ。その一瞬で、その人が知りたいこととその成り行きが全部わかる。その人が一番いい顔をしてる未来から、必ずここは通るという分岐点を現在まで辿っていくんです。

でも、人の気持ちは、今この瞬間でも、彼女が可愛い、今日のご飯何食べよう、お腹が痛い、明日の仕事めんどうだとかコロコロ変わりすぎる。でも、「占いの館」では、人の気持ちを知りたがる人が多くて、僕も（人の気持ちが占える）タロットをやろうとしたんですけど、カードの作者の意図と僕がカードから受けとる印象が違って無理でした。だから、スピで分からない問題は1人の人間として相談に乗っています。

B の場合：自然とスピリチュアルな占いを習得し、必要に迫られてコスモロジカルな占いも自発的に学習し、習得。

初めて見たのは3~4歳の頃。夜ふと目が覚めたら壁から女の人がぬっとこっちを覗き込んで。怖くなって、近くで寝とった祖母を起こしたら、「ああ、見えるんやね。気せんでええよ。悪させんで」と言われて安心したのを覚えとります。成長するにつれ、みんなに見えとるもんか、私にだけなんか分かるようになってきて。こういうもん（霊能力）は1人1人違うから人から、習っとらんし、こういうのは習えんと思います。

私の場合、神さんの力を借りて意図的に見とりますけど、神さんが必要と判断するところまでしか見させてもらえん。かなり遠い所から来てくださる方もおるもんで、見えませんでしたじゃ、あかん。何かは、きちんとお答えせんと。それに、霊視であかんと分かってても、じゃあ、どうしたらよくできるかは分らんのです。だから、学問としての占いがいるんです。やもんで、九星気学を高校2年生の頃から2年間毎日勉強して、他にも家相、墓相、人相、印相を必要に応じて勉強しました。

Cの場合：スピリチュアルな能力が偶発したため、自発的な学習により活用方法を学び、スピリチュアルな占いを習得し、コスモロジカルな占いも自発的に学習して習得。

スピは生まれつきで、オバやイトコも見える人やで家系的なもんかも。両親に連れられて寺で霊能力を封じる祈祷を受けたけど効果ナシ。そのあたりからこの力はあかんのやとっていったの。それもあってか大人になるにつれ力は弱くなって、普通に就職して、結婚したの。今から15年前に目の奥に腫瘍ができて手術することになって、命を落とす可能性もあると言われてました。旦那が困らんように身辺整理をして、友人・知人にも連絡したの。その中の1人に以前お世話になった関西のスピの先生がいて、「死なないよ。(こういう手術でこうなって)第三の眼が開くね、おめでとう」と言われて。こっちは死ぬかもしれないと思ってるのに！と腹が立ったんやけど、実際にはその通りになったもんでビックリ。手術の後、目の前がキラキラ光ったり、ビジョンが浮かんだりして、視神経に障害が出たか頭がおかしくなったかと思って、病院に行ったけど異常はなかったの。だから、この先生のスピの講座で勉強したの。コースで少人数だった。受講して、これがスピだって分かって安心したし、この力をどうやって役に立てればいいのか分かって。

私の場合、スピでは断片的にしか分らんもんで、伝えてみて相手がピンとこないとストーリーにならん時がある。そういう時はエンジェル・カードで補足するの。人生の流れもスピでは分からないから、(スピリチュアルな力が復活する前に習得済の)カラーセラピーで見るかな。全部、人からの紹介や自分で探した講座で勉強したよ。

Dの場合：趣味としてコスモロジカルな占いを学習し習得。占い師になった後、スピリチュアルな占いに関心を持ち、自発的にスピリチュアルな占いを学習して習得。

最初、近所の文化センターのタロット講座に行っって、その後、電話帳で探した本格的な教室に通いました。占い師になってからは、自分が興味を持った占いやお客さんが好きそうな占いの講座や本をネットで探して勉強しています。テレビとかでオーラが流行った時は、そういうお客さんが増えたから同僚の占い師が主催したオーラの講座にも行きました。少人数制の5回完結コースで理論と実習をやっって、すごく見えるようになった人もいたけど、私はちょっとだけ。見てほしい人がいたら軽く見る程度。(ネットで探した別の講座で)チャネリングも習っって

少しできるけど、私はスピだけではちょっと（鑑定できない）。スピも知識の方も広く浅く。だって、深くなると難しくなるし、ここではそこまでいらぬ。色々できれば何かが引っかかると思うから。

E: 強い関心を抱いたコスモロジカルな占いを学習により習得し、特定の占術の研鑽に勤しむ。

色々やったけど四柱推命とタロットが一番。手相も見るけどこの2つがメイン。タロットは完全独学。四柱には1000万円以上使つとる。名古屋の有名な占い師の講座は、初級10万、中級50万、上級100万（全1年半～2年コース）やった。でも、そこらへんの本屋で売つとるような内容で、しかも間違つとるもんで質問ばかりしとつたら、先生に嫌われて通えんくなった。その後、雑誌の広告欄やチラシで見つけた東京や大阪の教室に通つて、上級講座まで全部取つた。でも、その師匠も死んでまったでもう誰にも聞けん。勉強したことを基に自分の経験でやってくしかない。四柱は一生の流れや性格が分かるけどタロットは短期的な事しか占えん。タロットは相手の気持ちや事の成り行きは占えるけど四柱はできん。だから組み合わせんと。占いの勉強はすごくしたもんで、これで全部（質問に答えることが）できる。お客さんに聞かれても理論的に全部説明して、私が適当なインチキを言つとるわけやないと証明できる。

3. 4. 占い師になった理由

ここでは、なぜ占い師として働くことにしたのか、どのような経緯で占い師としての活動を開始したのかについてまとめた。

Aの事例：一般的な社会人をしながら、口コミで活動した後に「占いの館」に在籍。

学校を卒業した後、普通に会社に勤めて、10年前にコンピューターの仕事で独立しました。その頃から仕事で知り合う人に、「多分こうなるかな」と伝えていて、あまりにそうなるから理由を聞かれ、スピを愛に思って去っていった人もいるけど、思わない人だけが残った。そのうちに「みて」と頼まれるようになりました。そのなかの1人からこういう場所があると「占いの館」を紹介されて、自分でホームページを見て応募しました。実は、最初は占い師がどんなインチキで騙しとるか暴いてやろうと思ってました。でも、それは僕の思い込みで、実際は、カウンセリングやセラピーの道具として占いをを使うのが占い師と知つてびっくりしました。

Bの事例：宗教的指導者へと至る過程で、口コミで活動した後に「占いの館」に在籍。

私は力を授かつたうえ長男やったもんで、だんだん断れんようになったのと、お寺で食べていくのは大変で家計を助けるために鑑定を始めました。14歳の時です。高校は何とか出れたけど（鑑定や家を継ぐための寺の修行があつて）学校にあんまり行けんくて、同級生が遊んどるのを見て「ええなあ」と思つとりました。高校卒業と同時に跡を継いで、お寺で鑑定しとつた

んですけど、建物が古いもんで冷暖房やトイレの設備への不満がご相談者さんから出て。どうしようかなと思っとったら、「占いの館」からスカウトがきたんです。「占いの館」では売上が折半やけど、設備や場所を自分で用意せんでもいいし、お寺がいい人はお寺で、きれいで快適なところがいい人は「占いの館」でというようにすればいいと。「占いの館」では、これまでとは違う人のお役に立てるかもしれないと思い、神さんからのお導きかと感じて働くことにしました。

Cの事例：社会人を経験し結婚。自宅サロン等でロコミで活動した後、「占いの館」へ在籍。

自宅の一角をサロンにしてロコミでやってたの。公的な資格があるわけでもないし、自分がなんなのか、これでいいのか（役に立っているか、自分は何をしたいか）分からなくて自信がなくて、、、。そんな時、テレビでたまたまこの「占いの館」が出とって、一般的に通用するか試してみようと思って、占いでいい時期が来るのを待って自分で電話して面接を受けたの。

Dの事例：占いをする場を求めて「占いの館」に在籍。

最初は人の紹介で「占いの館」に入って、そこが潰れた時、自宅の一室が空いたのでサロンにしました。でも、その部屋が使えなくなってここに来ました。最近はネットやSNSが怖いし、自分のペースでできる「占いの館」の方が気楽。収入は不安定だけど、レジ打ちは嫌だし、定年もないし。

Eの事例：占いをする場を求めて「占いの館」に在籍し、その後、独立。

いつか占い師になろうと思っとったけど、離婚してシングルマザーになったもんで、稼がなあかんかった。最初は掛け持ちでスナックのチーママやっつとる時にお客さんを見て、その後、イベントや（「占いの館」で）金曜日の占い師をしてお客を掴んで、2000年に名古屋市内の雑居ビルにサロンを構えて独立した。それ以降は占い一本でやってきたのが誇り。

3. 5. 小結

占いへの関心の芽生えに関してAとBの事例は特殊である。大半の占い師はCやEのように雑誌や占い本、テレビで占いに親しみ、関心を持っていた。また、以前は特に占いに関心がなかった、あるいは、懐疑的であったと語る占い師もいた。こうした人はDのように悩みを抱え、周囲の人に相談できない、あるいは、相談しても有効な回答が得られない事態に陥り、占い師に相談して感動した経験から占いに関心を寄せていた。Eのように10代までに占いに非常に強い関心を持った占い師は少数派であるが、こうした占い師は思春期に関心を持った占術の研鑽を積む傾向にあった。

占術の学習については、A、B、Cはスピリチュアルな能力を偶発的に獲得している。しかし、

A や B のように自然に占いができたという人は少数派であり、多くは C のようにスピリチュアル講座で補足し、習得していた。この 3 人はスピリチュアルな占いだけでは対処できない質問があるためコスモロジカルな占いも必要だと認識している。B、C、D は両系の占い師であるが、B と C はスピリチュアルな力だけでも占いができるが、D はできないと語る。一口に両系の占い師といっても個人差はかなりある。また、コスモロジカルな占いは学習すれば誰でもできるという前提があるが、A のように習得に至らない人もいる。習得できた人でも D のように初級・中級レベルまでなのか、E のように上級レベルまでなのかは占い師によって異なる。そして、ほぼ全ての占い師が、相談者の質問に答えるために複数の占術を組み合わせることが大切であると認識し、占術の学習に対して積極的かつ意欲的であった。

占い師になったきっかけについては、A、B、C のように偶発的にスピリチュアルな力を有した人では、口コミで活動し、その後、「占いの館」に入る場合が多い。また、コスモロジカルな占い師では、D と E のように占いができる場を求めて「占いの館」に在籍する場合がほとんどであった。いずれの場合も、自発的に占い師になっているという点では同じであった。

4. 占い師としての活動

この節では、メディアの中の占い師像を一般的な占い師像とすることは妥当かを検討するために、占い師が占い師としての自分をどのような存在だと考え、どのような実践活動をしているかを分析する。

4. 1. 占い師としての自己像

ここでは、占い師の自称と占い師である自分をどのように認識しているかについてまとめる。

A の事例：

占い師＝インチキというイメージがするし、スピは当たる当たらないじゃない。僕は相談者の人生がいい方向に行く手伝いをするコンサルタント。稀に僕が見たよりいい結果や早く目標に到達する人がいる。未来は努力で変えられるというのを確かめたくて鑑定をやってるのかも。

B の事例：

占い師だと当たる当たらん、いい悪い、あんたはこうやと決めつけるイメージ。私は相談者さんの質問にお答えするだけだから違う。私は鑑定士、世のため人のためやと思っております。

C の事例：

「占いの館」で働いて、当たる当たらないの占いを求める人は他力本願な人で、カウンセリングを求めるのは自分で頑張っていく人だと分かって、私はカウンセリングやセラピーをやり

たいんやって思ったの。カウンセリングを通じて、最終的には相談者が私の所に来なくなるのが理想。私は当てようと思ってないし、自分を一度も占い師と思ったことはないかな。

D の事例 :

私は占い師なんだけど、カウンセラーみたいなことと言っています。私の鑑定ではこう出ていますよ、こうしてみたらどうですか？と伝えるだけ。決めつけたり脅したりしない。そういう（細木のような）鑑定はひと昔前で、あなた不幸になるとか脅したり、決めつけたりする鑑定はだめ。楽しくないし、前向きになれない。相談に乗るだけで、決めるのは本人。

E の事例 :

占いで人を助けて前を向けるようにするのが占い師。お客さんが来たいときに、いつでも来て、また頑張ろうと思えるようにするのが大事。独立してからは、これ一本でずっとやってきたから腕には自信がある。でも、本当は占いを極めるためにやっとなるんかもしれん。

4. 2. メディアのイメージと自己像の間のジレンマ

インタビューを通じて、占い師は自分達が一般に理解されていないと語ることが多かった。ここでいう一般的とはメディアとそのイメージを受容した客である。ここでは、どのような時に自己像とのズレが生じるかをまとめた。

A の事例

「占いの館」では、楽しみ目的の人も多いけど、それは別にいい。問題はスピなら何でも正解(必ず成功する方法)が分かると思ってる人が多いこと。「行動次第」と言うと「テレビでは！」と食って掛かってくる人もいる。あと、当たるんですか？とかね。でも、「悪いことも 100% その通りで変えれなかったらどう思う？」と言うと大抵黙る。元からのお客さんにはそんな人いない。あと「占いの館」はこっちの状況なんてお構いなし。テレビでは何人も連続で見とるかもしれんけど、あれは編集がある。8 時間 1 回もトイレにも行けない日もあった。スピは自分のコンディションに左右される。(見えるからといって) 見ないかんわけじゃないし、(本業もあるし) やりたい時に、見てあげたい人にだけやればいい。

B の事例

「占いの館」でびっくりしたのは、自分の行いを棚に上げて、全部いいようにできるのがスピやと思っとる人が多いこと。窺めると、「テレビと違う！ インキチ」と言われたこともあります。いい結果にするためにどう努力するか、悪い結果をどうやって避けるかが大事やし、その時は嫌やなあと思っても、長い目でみたらその経験が必要という場合もあって、一概にいい悪

いは言えませんわ。「占いの館」は休憩なしで予約を入れる。神さんのお力を借りとっても生身の人間。超人やない。お寺なら自分で客を選べるし、調節できる。本当に困って、頑張るとる人の力になりたいと思っております。

C の事例

個人サロンはほぼカウンセリングだけど、「占いの館」はエンターテイメント目的の人が多。失敗したくない気持ちが強いのか、「今のままでは難しそう。こういう努力がいる」というと「じゃあ、辞めます」という人が多い。はあ？と思う。(テレビや雑誌の占いみたいに)、このアイテムを持てば自動的によくなるとかない。「努力が基本」に納得できん人も多。テレビではそう(相談者は「あなたは悪くない」と言われ、「これが本当の私なんや。このままでいいんや」と)なるとるかもしれんけど、、現実には、明らかに変な(人として間違っているような)人もおる。言われたいことと違うという理由でインチキと言われて(掲示板や SNS に書かれて)も困る。

D の事例

「占いの館」ではなんとなく興味があって来るお客さんが多。あまりに悩んでいる人より、そのほうが楽ですね。でも、おかしな宣伝で占い師が未来を変えてくれると思っている人がいるのは困りますね。勘違いして来た挙句、思い通りじゃないと怒られてもね、、、。

E の事例

深い悩みがある人が来たら、腕の見せどころ。テレビでも雑誌でも当たるかしか問題にしとらんで、お客はそういうイメージで来る。でも、こっちが本当の占いやで。私も酷い目にたくさんあったけど、いろんな経験をしたほうが人の気持ちが分かるでいいと思とる。

4. 3. 小結

占い師としての自己像は、「人を助ける」「相談に乗る」存在であるという語りが共通しており、今回の調査では全ての占い師が同様の自己像を持っていた。ただし、自称に関しては、Aはコンサルタント、Bは鑑定士、Cはカウンセラー／セラピスト、Dはカウンセラー、Eは占い師などのようにそれぞれであった。また、占い師が認識している世間が持つ占い師のイメージには、大きく分けて2つある。1つはメディアが占い師をバッシングする際に繰り返し用いてきた金儲けやインチキという負のイメージである。もう1つは、占い師特集や宣伝文句として強調される「当たる／当たらない」「いい／悪い」という占いサービスに関するイメージである。前者の負のイメージに関しては、「人を助ける」という自己像と異なっている。後者の「当たる／当たらない」「いい／悪い」という二項対立的な占いサービスを提供する人＝占い師というイ

メージも、カウンセラーとしての自己像とは異なっている。このようなメディアの表象と自己像とのズレを占い師は感じているといえる。

いずれの占い師も占いサービスが持つエンターテイメント性を否定してはいないが、自身の活動はカウンセリングとして認識しているため、エンターテイメントとしてのみ扱われることは心外だと思っている。また、メディアの表象と自己像のズレが深刻な問題として現れるのは、客が持つ占い師に対するイメージと占い師の実像が異なる時である。A、B、Cは、「占いの館」では、テレビと同じ経験を求める人の多さに言及し、B、D、Eはメディアの煽り文句のイメージから、占い師に占いをしてもらえば運気がよくなり望みが叶うと考えている人がいると話した。ほとんどの占い師がこのような客とのトラブルを経験しているようであった。こうした客が持つ占い師像と自己像のズレは、占い師からは客の勘違いという言葉で表現され、勘違いした客を発生させる原因はメディアによる占い師や占いサービスの表象にあると認識されているといえる。

5. 考察

本稿では、近年の民間巫者研究が「外側」とみなしている一般的な占い師へのインタビューを通じて、占い師になる過程と占い師としての自己像に関する個別事例を検討してきた。3節では、どのように占いに関心を持ち、占いを学び、占い師になったのかを分析した。3.1.で示した通り、A、B、Cのようにスピリチュアルな力を有してしまっただけの生きづらさや、Dのように悩みや葛藤の経験を持つ占い師が大半であり、Eも趣味が高じてはいるが、その人生は波乱万丈である。そのため、占い師になる人は本人にとっては何かしら衝撃的なできごとや苦悩を経験している点は、先行研究の巫者像と重なる部分があるといえる。しかし、占いを受けた経験が占いへの好奇心を刺激し、自発的かつ積極的な動機で学習を開始する点は先行研究とは異なっている。

占術を学ぶ方法は、コスモロジカルな占いもスピリチュアルな占いも講座や書籍である。CやDの語りからスピリチュアル講座では、占い師になるための急激な身分変化や生活の変化は伴わず、日常生活と講座を往復しながら学習が進むことが示されている。こうした講座は料金を支払って申し込めば誰でも受講できる。そして、個人差はあるものの所定の回数を終えれば何かしらの片鱗はつかめることになっており、ここには Atkinson が指摘するように誰でもスピリチュアルな力を使えるという前提がある。つまり、スピリチュアルな占いもコスモロジカルな占い同様に、西洋合理主義的な教育システムによって効率的に伝達可能な知識や技術としてみなされるようになっている可能性を指摘できる。また、どのような占術であっても習得した後、その技術をどのように活かすか、あるいは活かさないかは、生き方の問題として個人の自由意志に委ねられているといえる。

4節では、占い師の自己像とメディアの表象について検討した。占い師は、メディアにおけ

る単なるエンターテインメントの担い手として扱われ、何かあるとすぐに負のイメージを負わされると認識しており、カウンセラーとしての自己像との間での葛藤があった。占い師が認識する負のイメージには、金儲けやインチキの他にも、決めつける、脅すなどの細木の鑑定スタイルも含まれていた。細木を悪いイメージでとらえるという点については、調査地の「占いの館」では20～40代の女性が相談者の半数以上を占めていたことと関係がある可能性がある(注4)。なぜなら、細木が伝統的な宗教的価値観を日本文化として強調し断言することで50代以上の女性から支持されたのに対し、江原は個人がこの世に生まれてきた意味を強調し語りかけることで30～40代の女性から支持されたからである[石井 2010]。そのため、占い師が客の嗜好を敏感に察知していた可能性は否定できない。しかし、多くの占い師は江原のカウンセリングとしての占いを意識しており、正のイメージで捉えていた。メディアが提示した江原像が占い師像の1つのモデルとなり、占い師＝カウンセラーという自己認識につながっていると考えられる。そうだとすれば、占い師はメディアの表象と自分を対比させ、一方ではそのイメージに反発し、他方ではそのイメージを受容しているといえる。

占い師は相談者が前向きになる占いを提供したいと考えており、これはメディアが繰り返してきた当たる／当たらないという単純な表象より、実際の占いは複雑であるという認識がある。占い師の自己像とメディアの占い師像のズレが問題として意識されるのは、メディアの占い師像を受容する客とのやりとりにおいてであった。占い師は客が持つメディアに登場する占い師との同一性を求める眼差しや、自己肯定を強調するメディアの演出を鵜呑みにする客の態度に対して不満を抱いていた。確かに、占い師は江原が提示したカウンセラー像に自己を重ねてはいるが、3節でも見たように占い師と一口に言っても、実際にはかなり多様であり、それぞれが自分の個性を活かした活動することを目指している。そのため、メディアが提示する占い師像と社会で実際に活動している占い師を同一にみなすことは適切とはいえない。

本稿では、一般的な占い師は人生の選択肢の1つとして自発的に占い師になっており、個人の価値観や志向、多岐に渡る学習の選択肢、ライフスタイルに合った働き方が反映された結果、多様な占い師がいることを示した。また、占い師はメディアによる占い師の表象に反発したり、受容したりしており、メディアの占い師の表象をそのまま一般的な占い師像として扱うことは妥当ではない。むしろ、2000年以降の先行研究が「境界部」の巫者に多様性を見出そうとするのと同様に、「外側」の占い師に関しても多様性を見出していく視点が必要である。こうした個別の実践に着目することが、「新しいスピリチュアリティ」の実態に迫り、その特徴を浮き彫りにすることにつながると考えられる。

6. おわりに

本稿で見てきたように、個々の占い師の生のあり方と学習が占い師の多様性を生み出し、占い師として活動することは占い師自身の自己実現につながっている。また、占い師として相談

者と接するようになった後に、より積極的に占術の学習する点から占い師の多様性は相談者側の多様な価値観と生の在り方を反映していると考えられる。こうした多様な占い師が希求される背景に、現代社会における既存の宗教観や社会的価値観と現実の生の在り方との乖離があるのだとすれば、占い師はどのような位置づけにあるのであろうか。今回は取り上げることができなかったが、ほとんどの占い師が「占いやスピにどっぷりではだめ」と語り、占いやスピリチュアリティを活用して、自分自身はもちろん相談者が現実をどのように生きるかが大切であると考えている。また、占い師として活動を始めると、「辛い経験がある＝人の気持ちが分かる占い師」とプラスに解釈されるようになる。占い師が認識する人の役に立つ、人を癒すという使命の裏には、自分への癒しという側面が見え隠れしている。今後はこうした側面にも注目した研究が必要である。

注

- (1) 筆者の調査では、現存している「占いの館」のうち1982創業の神戸「ジェム占いの街」と1986年創業の原宿「塔里木（タリム）」が最も古いものであった。
- (2) 日払いか月払いか、歩合の割合は「占いの館」によって異なる。占いとして何を提供するかは占い師に一任されているが、お札や印鑑を売る、祈祷を行うなどの行為を許可する「占いの館」はほぼない。また、占いの鑑定料金はコスモロジカルな占い師よりもスピリチュアルな占い師の方が鑑定料は高い傾向にある。
- (3) 筆者は2011年10月から調査地の「占いの館」に在籍している。調査時は週に1回程度出勤していた。
- (4) 店長によると、「客は女性が70%で男性が30%くらい。女性の内訳は30代が一番多く、次に多い40代と合わせて過半数で、次いで20代と50代以上が同じくらい、その次が10代。男性は若い男性同士のグループかカップルで来店する場合が多く、中年以降であると真剣に相談したい人が来ている印象だ」という。

参考文献

天野 紗緒里

2016「占いの「現場」における説得交渉行為：名古屋市内の占いの館と占い師の事例から」『説得交渉学研究』8：51-67。

2017「「占いの館」の社会的位置づけ—占いをめぐるイメージ・認識についての考察」『南山考人』45：23-45。

2018「現代日本社会の都市部における民間巫者に関する文化人類学的考察：東海地方で活動する占い師の事例から」、修士論文（提出先：南山大学大学院）

石井 研二（編）

2010『バラエティ化する宗教』、石井研二（編）、青弓社。

エリアーデ、M

2004『シャーマニズム 古代的エクスタシー技術 上』、堀一郎(訳)、ちくま学芸文庫。

小池 靖

2008『セラピー文化の社会学—ネットワークビジネス・自己啓発・トラウマ』、勁草書房。

佐々木 雄司

1988 「“宗教”と精神衛生」『こころを癒す—信仰と精神医学』、佐々木宏幹・佐々木雄司・小田晋・山折哲雄（共著）、pp.23-56、同朋舎出版。

塩月 亮子

2002 「表象としてのシャーマニズム—沖縄の映画と文学にみるアイデンティティ・ポリティクス—」『哲学』107：1-20。

島菌 進

2007 「スピリチュアリティの興隆—新霊性文化とその周辺」、岩波書店。

2012 『現代宗教とスピリチュアリティ』、光文堂。

鈴木 健太郎

1995 「占いの諸類型とその特質—現代日本の占い本を通して」『宗教と社会』創刊：5-28。

種田 博之

2001 「占い師の特徴—現代日本社会における「自発」—「体系的知識」型への傾性」『産業医科大学雑誌』23(3)：263-276。

芳賀 学・弓山 達也

1994 『祈る ふれあう 感じる』、IPC。

宮家 準

1994 『生活のなかの宗教』、NHK ブックス 376。

村上 晶

2017 『巫者のいる日常—津軽のカミサマから都心のスピリチュアルセラピストまで』、春風社。

Atkinson, Jane Monning

1992 “Shamanism Today”, *Annual review of Anthropology*, 21: 307-330.